

特集にあたって

Editor's Introduction

羽成 隆司

Takashi Hanari

梶山女学園大学

Sugiyama Jogakuen University

我が国の各種プロダクツのデザインや色彩を個別に見たとき、無数の素晴らしいものに出会うことができる。しかし、個別ではなく、景観や景色といったレベルまで対象を広げると、必ずしもそうではない。すなわち、現在の我が国の色彩環境には多くの問題点がある。それはかなり以前からしばしば指摘されてきたことでもある。しかし、問題点に対する改善の取り組みも多く行われてはいるものの、十分に行き渡っているとは言いがたい。日本色彩学会としては、この問題に無縁ではいられないであろう。本特集では、まず、日本の色彩環境の問題点とその改善に必要な基本思想と指針について(林英光氏)、次に、「美しい色風景」というものをどのように捉えるべきかについて(三木学氏)、最後に、日本における美しい色風景を具体的に明示していくための「色風景プロジェクト」について(川澄未来子氏)、事例を交えながら解説される。根本にある問題の提起→問題点の整理と方法論→問題解決に向けた実践的取り組み、といった展開となっている。

林英光氏による「日本の色彩環境の問題の所在と行く方：色彩の『レジリエンス』で未来を」では、日本人の美意識や歴史・伝統を踏まえた未来に向けての提言と、建築物やデザインの実例が紹介されている。執筆者の林英光氏は、本学会の研究会の一つ「美しい日本の色彩環境を創る研究会(LOJ)」を立ち上げ、これまで、シンポジウム、講演等で、色彩環境改善のための多くの提言や啓発を行ってきた。本学会誌でも、林・池田・小町谷(2014)¹⁾、羽成・篠田・鈴木・森友・高橋・林(2015)²⁾ほか、異なる領域の研究者とともに、全7回の連載に渡って多様な提言を行っている。

三木学氏による「『美しい色風景』とは何か?—カラスケープ・デザインに向けて」では、色彩理論が音楽理論を基礎としていることから、サウンドスケープに関する諸知見のカラスケープへの応用可能性に言及しながら、「美しい色風景」をめぐる科学的、理論的背景と、「美しい色風景」を作り出すための方法論が解説されている。

川澄未来子氏による「『日本の美しい色風景』サイトの制作と活用」では、前述の「美しい日本の色彩環境

を創る研究会(LOJ)」と「くらしの色彩研究会(LC)」の会員の問題提起が出発点となった「色風景プロジェクト」の背景と具体的な制作プロセス、および、今後の展望が説明されている。林氏の提言が、我が国の風土・歴史・伝統・文化を背景にしたいわばトップダウンのアプローチであるのに対して、このプロジェクトは、会員の日常的な美的経験を大量に収集することから始めようとする点で、ボトムアップのアプローチである。

さて、次頁以降の各氏による解説を読んでいただければ明白であるが、本特集における“美しい”とは、豪華、派手やか、上品、あるいは、芸術的、感動的という言葉が連想されるような、積極的に鑑賞の対象となり得るものだけが想定されているのではない。ここでの“美しい”をあえて別の言葉でシンプルに言い換えるとすれば、“幸福な”ということになるかと筆者は考える。

言うまでもなく、本学会員の研究テーマ、それぞれが拠り所としている学問分野やアプローチの方法は多種多様である。しかし、我々を取り巻く色彩環境に無関心な人、“幸福な”色彩環境・色風景を求めない人はあるまい。乱暴な言い方をすれば、あらゆる色彩研究者は、個別の研究テーマが何であろうと、また、明確に自覚していようとまいと、“幸福な”色彩環境・色風景とは何かを知り、それを実現することが最終目標なのではないか。本特集が、このような意識の共有につながっていくこと、そして、色風景プロジェクトが、本学会が取り組むべき課題のスタート地点となることを期待している。

参考文献

- 1) 林英光・池田光男・小町谷朝生：研究会からの提言 日本の色彩環境の基本：美しい日本の色彩環境を創る研究会(1) 風土と伝統を活かし美しい日本の未来を創る、日本色彩学会誌。2014, 38(2), pp.73-78
- 2) 羽成隆司・篠田博之・鈴木恒男・森友令子・高橋晋也・林英光：研究会からの提言 日本の色彩環境の基本：美しい日本の色彩環境を創る研究会(3) 心理学と色彩環境、日本色彩学会誌。2015, 38(5), pp.369-374

特集「日本の美しい色風景」 Special Issue: Beautiful Colorscape in Japan

日本の色彩環境の問題の所在と行く方：色彩の「レジリエンス」で未来を
The Future Problems of Japanese Color Environment: Color Resilience for the Future

林 英光

Hideaki Hayashi

愛知県立芸術大学

Aichi University of the Arts

1. はじめに

日本色彩学会の重要な課題は、我が国の直面している様々な問題と同様である。現代の行き過ぎた物質文明と資本主義の行き詰まりが人間社会や自然界に様々な弊害をもたらしている中で、人々が求める幸せな世界とは何か、平和とは何か、心の文明とは何か。それらの有り様は、最終的にデザインや色彩に現れる。ここでは人の器である社会環境に関する基本について、「風土と伝統を活かして未来を創る」環境デザイナーとしての立場から述べる。

2. レジリエンスと色彩環境

五感の中で、デザインや色彩に直結するのは言うまでもなく視覚であるが、視覚は人間活動の約8割を占めると言われている。視覚の出発点となる光は太陽の核融合によって生まれ、その中の可視光線を人は色彩として享受し、幸せを願いながらこの地上に住んできたが、今や人間活動によって生じた地球規模の多くの問題の解決が迫られている。それらの問題は個々別々ではない。根源は切り離せない一点にある。今、世界は、「レジリエンス」という優しく穏やかなキーワードを手がかりに、諸問題に取り組まなければならない。

今起きている世界の紛争も、背景の長い歴史や種々の遠因はあるが、互いの許し合いを含めた近世あたりからの価値観で話し合えると平和になるのではと思う。その手本の一例は、スウェーデンとフィンランドの一触即発紛争の危機を託され、見事に救った国際連盟時代の新渡戸稲造の公平な発想の功績である。

未来の世界平和に最も貢献できるのは日本人なのかもしれない……。そう思う理由の一つは、日本人の根源には「もったいない」「みっともない」というような共有の美意識のようなものがあるからだ。国土計画・都市デザイン・商品デザイン等々の色彩一つ決めるにも、基本になる共有幻想が必要である。「説得」で

は気まずさが残る。共有幻想による「納得」によって決定・結論を得る方がよい。相手の気持ちになり、「慈しみ」の心が共有できれば、世界平和への大方針が見えてくる。東アジア5000年の都市の理想である四神相応は、現在の京都、名古屋、東京に生きている(図1)。

まず、環境の基本となる地域の風土、伝統、大地の色、植生、特徴的造形、色彩を把握しよう。ここから新たなデザインが始まる。



良き心のつくるものは良きパワーを、悪しき心のつくるものは悪しき影響を。

図1 四神相応略図

3. レジリエンスと未来環境

色彩を大量に活用し、商品を送り出すファッションの分野が、石油産業に次いで2番目のCO₂発生源であるという。色彩が気候変動にこれほど関わっていることには驚く。しかし、今や環境に取り組まない企業とは取引をやめると宣言する意識の高い業界も国外では出始めている。こうした状況に最も戸惑うのが日本の業界であろう。しかし、近世までの我が国はエコな暮らしを普通に実践していて、何一つ捨てるものの無

特集「日本の美しい色風景」 Special Issue: Beautiful Colorscape in Japan

「美しい色風景」とは何か？ - カラースケープ・デザインに向けて

What is a "Beautiful COLORSCAPE"? - Towards COLORSCAPE Design

三木 学
Manabu MIKI

株式会社ビジョナリスト
Visionarist Co., Ltd

1. はじめに

本プロジェクトでは、環境における色彩の美や調和のイメージを広く社会で共有するために、日本色彩学会会員から「美しい色風景」というテーマで文章と写真を収集し、ウェブサイトで公開していく。その前提となる「美しい色風景」とはどのようなものなのか考察をしていきたい。

2. 環境を音から見直す サウンドスケープ (音風景)

「色風景」という言葉は、感覚的には理解できると思うが、一般的に使用されている言葉ではない。ただ、風景に色はつきものである。景色という言葉もあるように、風景の中で色彩が占める割合は大きい。それをさらに強調して「色」と付けるには意味がある。

「音風景」という言葉がある。ある時間・空間における音の環境ということだが、1996年には、環境省によって「残したい“日本の音風景100選”」¹⁾なども実施されており、こちらは直感的に理解でき、すでに馴染みがあるかもしれない。しかし、「音の風景」とも言われるこの言葉の歴史は意外に新しい。もともとカナダの作曲家、マリー・シェーファーが1960年代後半に提唱した「サウンドスケープ (Soundscape)」という概念を訳したものだ²⁾。シェーファーは、前衛作曲家ジョン・ケージの影響を受けている。ケージは1952年に《4分33秒》という、4分33秒間、演奏者が何も音を発しない革命的な「曲」を発表した。しかし、会場の内外や観客の出す音も含めて、音が消えていたわけではない³⁾。後にこの曲は、すべての環境の音に耳を開くものとして、積極的な評価を受けるようになる⁴⁾。

シェーファーは、楽音と非楽音、人工音と自然音が織りなす音環境を、「サウンドスケープ」と名付け、体系化する作業を行っていく。その最初の集大成と言える本が『世界の調律』である。シェーファーは「世界をマクロコスモス的な音楽作品」と捉え、文献調査による過去のサウンドスケープ、自然や動物の音に加えて、カナダを中心に各国を現地調査して、様々な音環境の記譜法を掲載している。さらに、調和のとれたサ

ウンドスケープを作り出すサウンドスケープ・デザインの可能性が示唆されている⁵⁾。ある共同体の環境音を、「基調音」、「信号音」、「標識音」に分け、今までにない広域かつ非楽音の記譜法は、ケヴィン・リンチが『都市のイメージ』で示した都市の分析法も参照されているだろう⁶⁾。

特に有名な調査は、教会の鐘の音が、時代ごとにどのような範囲まで聞こえていたか調べたものだ。シェーファーによると、キリスト教の共同体において最も聖なる信号音は教会の音であり、教区とは鐘の届く範囲内に定められた音響空間だったという。人と神を結び付け、悪霊を追い払うのに役立つとされていた⁷⁾。しかし、産業革命後の環境騒音の影響もあって、聞こえる範囲が小さくなっていく。そこでは、近代文明によって、信仰心が薄れていくという意識の問題も明らかにされている。実は、鐘の方が「騒音」として取り外されていることが数多く報告されているのだ⁸⁾。このように、サウンドスケープは、単なる物理的な聞こえの範囲ではなく、心理的な風景でもある。

物理的な環境だけではなく、心理的な風景であるため、文化によってサウンドスケープの在り方は異なる。例えば、音楽学者の中川真は、京都のサウンドスケープの歴史の変遷を調査した『平安京 音の宇宙』において、シェーファーと同様に鐘の音を調査した⁹⁾。その際、東西南北の寺の鐘の音の高さを調べ、それらが中国の陰陽五行説に由来していることを突き止めた。

つまり、キリスト教と違うが、鐘の音がコスモロジーの要素になっているのだ。あるいは、インドネシアにも出かけ、ガムランや路上販売の音を調査し、西洋とは異なるアジアのサウンドスケープの体系があることを示唆した。サウンドスケープ・デザインによって、バランスを欠いた環境音を修正するには、物理的な規制だけではなく、そのような共同体の社会的側面、心理的側面を重視しなければならないのだ。

3. カラースケープ (色風景) の先駆例と可能性

サウンドスケープのような考え方は、色彩にも応用

“日本の美しい色風景” サイトの制作と活用

Site Construction and Future Works of “Beautiful COLORSCAPE in Japan”

川澄 未来子 名城大学
Mikiko KAWASUMI Meijo University

1. はじめに

「心に残る色風景を共有しよう。」というメッセージで始まる“日本の美しい色風景”サイトを、2021年6月より日本色彩学会公式サイトに置いている(図1)。本稿では、このサイトの背景にある、“日本の美しい色風景”プロジェクトの動機やねらい、サイトの機能と使い方、今後の展開イメージについて紹介する。

2. プロジェクト開始の動機と経緯

“日本の美しい色風景”プロジェクトは、人が感じる「美」を集めて共有する活動である。きっかけは、美しくない景観の問題点を指摘しあう場面に居合わせた数人が、「そもそも美しい景観に正解はあるのか?」「目指すべきゴールは一つなのか?」という素朴な疑問を抱いたことに始まる。ネガティブな指摘や議論は気が滅入る。まずは見本になる「美」の多様な実例を集めて可視化し、どう美しいか、なぜ美しいかの方に向き合う、つまり原点に立ち返ってみることになった。

景観の専門家の方々からは、何を今さら?とお叱り

を受けそうである。ただ、このプロジェクトの対象や定義は、思いきって拡張した。まず色風景の対象は、景観に限らず、モノやコト(祭事や生活)、過去の記憶まで広げた。“美しい色風景”の定義は、単純な視覚的な色彩バランスにとどまらず、音、香り、手触り、温もり、佇まい、思い出などが重なり合った総合的な体験とした。そして、後世に伝えたい“美しい色風景”を、色彩学の見識をもった日本色彩学会の正会員からノミネットしてもらう方式とした。つまり、学会員が研究対象としている、環境、景観、建築、製品、伝統工芸、食、服飾、コスメ、芸術、広告、言語、教育、歴史など、広い分野にまたがる。日本色彩学会の12の研究会の枠を超える、横断的かつ学際的なプロジェクトである。そして、この活動によって、日本や日本人がもつ豊かな風土・伝統・テクノロジーなどを再認識し、未来のモノづくり、マチづくり、ヒトづくりに繋げることを目標とする。そんな壮大な計画の活動を、コロナ禍の2020年夏にスタートさせた。

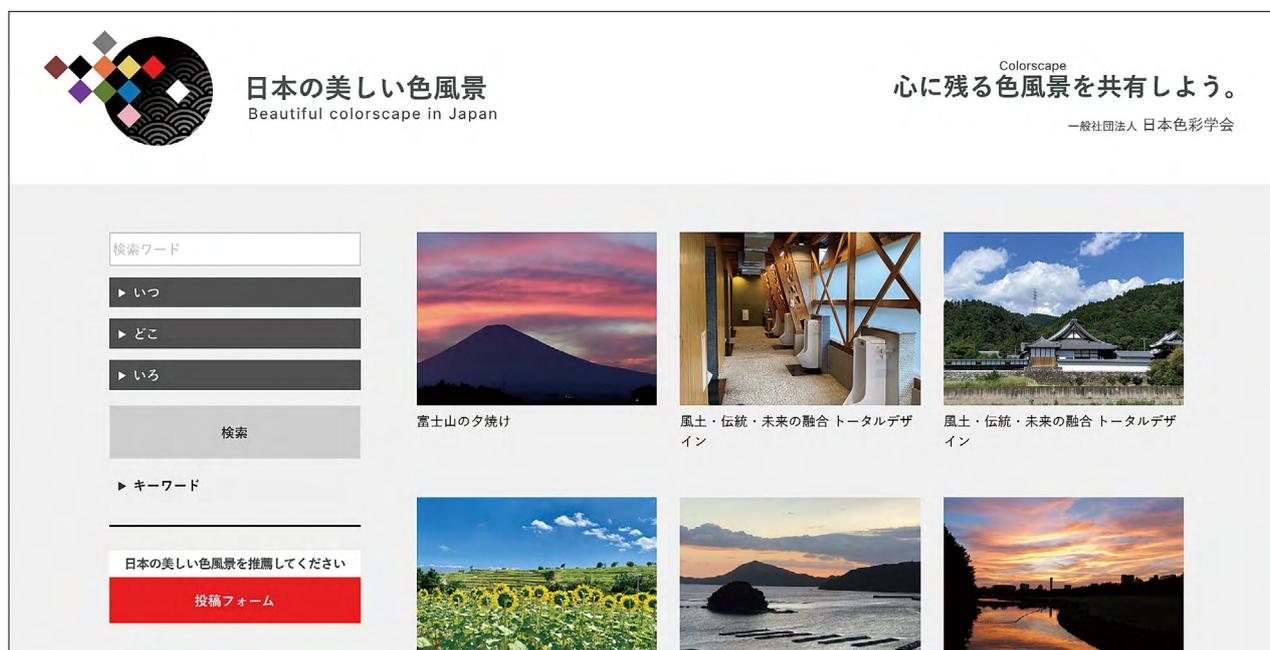


図1 “日本の美しい色風景”サイトのトップページ(学会員のみアクセス可) <https://color-science.jp/colorscape/>